

京都市中に現存する能の舞台の造形(3)

横山 勉*

A study of the formative elements of existing Noh stages in Kyoto city (3)

Tsutomu Yokoyama

The Noh stage which is existing in Kyoto city shows various formative elements. Although the Noh stage of the Imamiya Otobisyo is the full-scale, the ornament is moderate and is expressing simplicity. Conceiving of the Noh stage of the Hokyoden as the makeshift stage, the construction by the Kitayama logs is expressing softness. The Noh stage of the Nashinoki Shrine is the indoor stage, and is suitable for the Noh of a small number of people. The Noh stage of the Gosha Shrine is the small-scale, and is the appearance of the farmhouse style.

1. はじめに

京都は能の大成者である世阿弥と深い関わり¹⁾があり、室町時代以来の能を伝統芸術として身近に捉え、能を支えてきた歴史的環境をもち、市中には様々な規模の能の舞台が現存している。能は江戸時代に完成期を迎えたが、それ以前の桃山時代に能の発展に大きく寄与した能好き者に豊臣秀吉がおり、茶の湯愛好より能の開始は随分遅く、期間は没する前の六年間に集中しているが、豊公能の創作、自ら自作能を舞うなど、その後の能に多大な影響を及ぼした。能の恩人とも言うべき豊臣秀吉を慕った三百年祭が京都の阿弥陀ヶ峰で盛大に執り行われ、その仮設舞台の遺構が洛北に伝わっている²⁾。江戸城本丸表能舞台の規範³⁾による本格的な能舞台とともに、その一方で定式を外した小振りで古風な能の舞台も存在している。能の舞台は象徴的空間であり、鏡板に描かれた老松などの能画があるのみで過度な装飾はなく、橋掛り、鏡の間を含む建築構成は簡素な造形である。

前稿の続報であり、京都市中に屋外の能の舞台をもつ豊饗殿（関西セミナーハウス）、今宮神社御旅所、梨木神社、五社神社を対象に、実測調査を中心として、その造形概要を述べるものである。

2. 豊饗殿能の舞台（関西セミナーハウス）

この能の舞台は比叡山西麓の修学院離宮や曼殊院の近くに位置する関西セミナーハウスの中庭に数寄屋風書院の造形で佇んでいる。多くの屋外の能舞台は神社に付属する形式で社殿の一部として

* 建設工学科建築学専攻

配置されるが、豊饗殿の舞台は、もともと明治31年(1898)の豊臣秀吉の三百年祭に際して阿弥陀ヶ峰中腹の太閤垣に建てられたものであり、続いて、明治32年(1899)の平安神宮における皇太子の台覧能で使用された後、解体されて豊国神社に保管されていた。その後、明治36年(1903)に狂言茂山家の京都能楽堂として再生⁴⁾を果たしたが、維持が難しくなり、能楽師小柳七次郎の所有を経て、昭和41年(1966)に寄贈を受けた関西セミナーハウスの現在地に移築されている⁵⁾。

日本の近代化とともに明治中期になると能の復興が進み、能舞台も新たに建設されるようになった。能好きの豊臣秀吉の三百回忌の奉納能のために建立された遺構である関西セミナーハウスの豊饗殿の舞台は、三間四方で檜材を使用するなど江戸時代に完成した能舞台の規範を踏襲しているが、舞台の柱をはじめ、その他の主な建築材料も北山丸太を用いるなど、他に類例を見ない造りで、比較的自由的な意匠で造形されている。北山丸太は地覆、框、腰束、軒桁、水引梁、舞台柱、後座柱、橋掛り柱、橋掛り桁で使われており、化粧屋根裏天井の垂木も小径丸太となっている。当時の舞台の詳細が風俗画報臨時増刊(164号)⁶⁾の太閤垣の条項に「能舞台は太閤垣の東北隅神饌所の東手に於て新築したるが此舞台一式は東京能楽会にて生駒委員が担当し佐々木技手が主任となりて設計したのなり舞台は檜材を使用し柱は北山丸太の周囲二尺長さ十五尺にて圓柱の儘に用ひたり舞台板は檜材の一寸にて舞台下へは正式の壺を埋むる筈なりしも左しては建築も悉皆変更せざれば能はざるゆえ壺の据所へは穴を穿ちて済する事とし、三間四方の舞台は南面して建てられ囃子座に列なる橋掛りは六間半の長さにて西北へ走り鏡の間は三間に四間にて橋掛りへ続く、此の鏡の間よりと舞台地謡座の開戸よりは廊下を以て相通じ而して舞台橋掛りの背面には五間に十間の楽屋を設うく・・・後略」と記されている。三百年祭の演能は五流派が揃い、三日間盛大に催されたものである⁷⁾。この舞台一式は東京能楽会の生駒委員が担当し、佐々木技手が主任として設計したもので、仮設の舞台ではあるが、江戸城表能舞台の規範による本格的なものであることがわかる。床板は当時のままではなく、小巾の檜材となっている。現在、舞台床下に六個の瓶が穴を穿って据えられており、三百年祭時の個数は判然としないが、穴を穿って音響の工夫をしていたことがうかがえる。豊饗殿の舞台は京都市内を見渡せる高台の庭にあり、その正面前の白州が観能空間となっている。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺きで、そこには飾金物が取り付けられていない高欄をもつ張り出し脇座がある。本舞台と脇座の床は連続しているが、本舞台は落し壁、水引梁下の欄間によって空間的領域が強調され、脇座と柔らかく繋がった舞台空間となっている。現在は本舞台をガラス戸で囲って会議室としての機能を付与している。脇座の奥に貴人口があり、その上に竹の節欄間が施されている。本舞台、脇座、後座の床板は全て正面へ向って貼られ、後座の床板のみ江戸城本丸表書院能舞台の規範と異なっている。舞台内部において建築部材の多くが丸太で構成され、欄間の装飾性とともにより典雅な柔らかい舞台空間を創出している。本舞台と83度の角度をなす橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き(一部檜皮葺き)である。橋掛りの主要な構造も北山丸太で構成され、軽妙な表現へと繋がり、橋掛りの背後の壁面に施された三間連続の横連子窓が、典雅な意匠となっている。能画は正面と脇の鏡板に描かれ、装飾の少ない舞台空間に彩りを添えている。鏡板に描かれた老松は松葉階数が七、五、三と様式化された図案であるが、堂々

とした幹振りで表現されている。若竹の脇能画にある切戸口は直接屋外へ通じている。

舞台と後座の化粧屋根裏天井による傾斜20度の舟底と傾斜15度の片流の構成は、床下の瓶の設置とともに音響効果を考慮した構造であるが、天井に配された丸太の垂木が旋律を奏でるように建築空間に柔らかさを与えている。本舞台、橋掛りの柱頭に組物はなく、簡素であり、仮設建築構成が内包する軽やかさが伝わってくる。、「能楽」⁸⁾掲載の当初の舞台である「皇太子殿下御覧大極殿仮能舞台」の写真をみると正面切妻造であるが、現在の豊饗殿の舞台は瓦葺き入母屋造であり、正面軒荷重を二本の丸柱と丸桁によって支持されるなど、その形姿は元のままではないが、丸太による柔らかな造形表現は継承されている。

3. 今宮神社御旅所能の舞台

京都市中の船岡山の東方、北大路大宮を下がった所に今宮神社の御旅所があり、広くはない境内に御旅所の舞台はある。今宮神社の神社抄史によると、天明8年(1788)の大火で東福門院が寄進した能舞台[寛永3年(1626)]が焼失した後、寛政7年(1795)に再建された⁹⁾ものであり、能舞台の竹の節欄間が施された貴人口裏の墨書により確認することができる。そこには「寛政乙卯孟夏、法眼元陳画」¹⁰⁾と記されている。鏡板に描いた能絵師の高位により能舞台の再建への強い意志が伝わってくる。正面鏡板の老松は江戸城表能舞台の規範による能画の定式(其のひとつは、鏡板に向って中心より左下に根方を起し、それから右上へ幹が曲がり延びる)を外して描かれているが、葉、幹が彩色豊かに丁寧に表示され、葉部の階数も整って安定感のある構図である。更に脇壁画、貴人口へと若竹が連続して描かれ、貴人口まで連続して若竹が描かれるのは珍しい。能画を多く奉納している日本画家の松野英世氏によると、この老松の梢に猿の顔がのぞき、十頭余は隠されている¹¹⁾そうである。その主題は「申楽」に起因するものと想像を巡らすことができる。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺で、飾金具が取り付けられていない高欄をもつやや細巾の脇座が張り出している。床は無目敷居により本舞台、脇座、後座、橋掛りに区切られ、本舞台、後座の床板は正面へ向って、脇座は短辺方向へ、橋掛りは長辺方向へ貼られおり、後座のみ規範の床板の貼り方向と異なっている。舞台と70度の角度をなす橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。鏡の間と切戸口を繋ぐ伝い廊下はなく、切戸口を開くと屋外空間である。舞台は折上格天井であり、能画の表現とともに豪華な造形となっている。能舞台における折上格天井の類例は少ない。後座は傾斜11度の片流の化粧屋根裏天井となっており、囃子方の音響効果を考慮したものと考えられる。

柱頭組物は舞台のみで、舟肘木で構成され、釘隠などの飾金物は施されていない。舞台正面奥の虹梁の側面には木瓜形の渦の文様が彫り込まれ、下部に眉の削りが施されている。虹梁上には中央を削り貫いた渦形の幕股が据えられている。目付柱、ワキ柱には渦形の肘木が取り付けられている。これら渦形の文様を彫り込まれた建築構成材は鏡板の能画とともに舞台空間の数少ない装飾であり、建築を魅力あるものにするため、華美を押さえながら意匠に工夫を凝らしている。正面妻飾として破風に飾り金物はないが、木連格子、猪の目懸魚が付き、獅子口が施された銅板葺き(創建時は桧

皮葺と考えられる)の二軒の檜白木造で、簡素な造形ながら堂々とした形姿で境内に建っている。境内は現在駐車場であるが、観能空間としての拡がりをもっている。

明治36年(1903)11月27日の「国民」、11月25日の「京都日出」の新聞¹²⁾に今宮神社御旅所演能の記述があり、前者に「去る二十三日、関西に於て類稀なる能楽こそ行はれたれ。其は外ならず、京都今宮神社の御旅所の舞台にてに観金二流の合併能楽ありしにて、先づ其舞台の日本第一なる事、見物数千人ありて宛然旧幕時代の町入能御能拝見の如き観ある事など、孰も通常の催とは異れり。聞くが如くんば、此今宮御旅所能は三百年前より毎年行ひ来りしが、・・・後略」、後者に「現今の舞台は徳川家より寄附したるもの由にて、古びたれども立派なり。天井は合天井となり、道成寺の時、鐘を吊る為に天井板四枚を取外す仕組なると、六間の橋掛りは珍らし。」とあり、現存する能の舞台の重厚な形姿と重ねることができる。今宮神社御旅所は芸事を嗜む人が多い西陣に近く、観世流、金剛流の演能が行われることもあって町入能のような賑わいを呈しており、観能の様子より伝統芸術への理解の深さを読み取ることができる。また、「隔冥記」慶安元年(1648)10月13日の条項¹³⁾に堀岡右京太夫によって観進能が行われたことが記されており、今宮神社御旅所は早くから能の興行があった場であることがわかる。

4. 梨木神社能の舞台

御所の東側に南北に細長い神域をもつ梨木神社は、明治18年(1885)10月の創建であり、その年の11月に能三番の奉納があった¹⁴⁾と記されている。梨木神社は萩の宮とも呼ばれ、秋には参道に萩の花が咲きみだれ、市中の萩の名所として知られている。さらに進むと境内の神門の手前に京都三名水の唯一現存する名水と知られる「染井の井戸」¹⁵⁾があり、水を求める多くの人々が訪れている。

舞台は社務所南隣接の入母屋造「能舞台」と言われる建物の中にあり、石造の二の鳥居を進んだ東側にある。桁行二間、梁間二間、入母屋造「能舞台」は四つ目の平面形式で、四分割されたひとつを舞台、その正面に観能空間としての十二畳の部屋があり、他に襖、板戸で可動間仕切られた十二畳の二部屋がある。四分割の間仕切りを取り払うと舞台を囲う三部屋を観能空間として拡張することもできる。この舞台は定式から外れ、規模も小さく、周囲より約15センチ高い敷舞台であり、親しい人々が集い、小人数で能を楽しむための舞台空間と考えられる。障子を開け放たれた奥の舞台床は敷地面より約1mと高いが、外部空間の参道より演能を楽しむことができる。直接外部に面していないため傷みが少ないこの舞台は大正期に建立された¹⁶⁾と言われているが、確証はない。舞台には浅い後座があるのみで橋掛り、脇座はない。一般の能舞台と異なり、省略された橋掛りと舞台が繋がる場所に引違い板戸が設けてあり、その上に渡された眉の削りのある虹梁によって本舞台に入る構えが表現されている。正面の鏡板には切戸口があり、鏡板裏の伝い廊下によって楽屋へと繋がっている。正面に切戸口がある類例が少なく、沼名前神社、巖島神社を数える程度である。この舞台の能画は三本の老松を中心として描かれた松並の梢上を七羽の鶴が飛ぶ磯の浜を正面の鏡板に、若松に霞たなびく海浜を両側面の板戸に描いている。原在泉(1849~1916)¹⁷⁾と記された落款が側面の板戸の左下隅にある。原在泉は狩野派の石田幽汀に学んだ原在中を祖とした能画家の四代

目であり、御所の絵を多く手掛けた原派の家風を受け継いでいる。三方を能画で囲われた床の低い敷舞台は正面性がより強調され、舞台前の観能席と一体性が深まる舞台空間となっている。

舞台は傾斜 14 度の舟底、後座は傾斜 17 度の片流の化粧屋根裏天井である。舞台奥の虹梁は装飾の彫物がなく、眉の削りを施した簡素なものとなっている。化粧棟木は虹梁上の豕叔首によって支持されている。舞台床板は後座と連続して正面方向に貼られている。六葉の釘隠し金物のみで装飾金物はほとんどなく、白い壁面、木の軸組、板戸などによる簡素な造形による端正な空間表現であり、写実的な能画が彩りを添えている。

5. 五社神社能の舞台

桂離宮より南へ 1 km のところに松尾大社の氏子地域内に下津林の五社神社がある。楠の大木が生い茂る五社神社境内に本殿、割り拝殿、能の舞台があり、それらは軸線上に並ぶように配されている。能の舞台の脇正面が本殿と対面する配置となっている。能の舞台正面西側に見所の機能をもつ、十一面観音立像を安置した観音堂¹⁸⁾がある。五社神社は神仏混淆の形態である。能の舞台と観音堂の間は観能空間としての境内が広がっている。

能の舞台に後座、脇座はなく、また正面の鏡板に能画が描かれていないなど、定式を外した質素な舞台である。茅葺きの農家風な佇まいであり、規模が小さく古風な舞台である。舞台の創建年代は明らかではない。入母屋造の舞台と割り拝殿は竿縁平天井で、切妻造の橋掛りは化粧屋根裏天井である。割り拝殿の舟肘木、渦文様の彫り込まれた虹梁以外は、舞台、橋掛りにも装飾は見あたらない。舞台床は礎石上に据えられた柱と束で支持され、床下には瓶等の音響効果を工夫した装置はない。舞台との角度 90 度の橋掛りによって舞台と割り拝殿が繋がれていて、橋掛り（棧瓦葺）と割り拝殿（棧瓦葺）の壁は全て開放され、舞台の鏡板が唯一の壁である。「言継卿記」永禄 11 年（1568）1 月 26 日の条項¹⁹⁾に当社で八田座の大夫による神事猿樂が行われたことが記されている。江戸時代以前より行われていたことがわかる。「京羽二重織留」²⁰⁾にも神事能の奉納の内容が載せられている。また、農村芸能の「六斎念仏」（昭和 37 年頃途絶）が演じられていた²¹⁾。古来より五社神社は能と深い結び付きがあることがうかがえる。

6. 寸法にみる能の舞台の造形

能舞台の完成期の例として万延元年（1860）の江戸城本丸表能舞台²²⁾がある。京都市中には現存する舞台として最古〔天正 9 年（1581）〕の西本願寺の奥能舞台²³⁾と表能舞台²⁴⁾（江戸時代前期）があり、また、豊臣秀吉の禁中催能により文禄 2 年（1593）紫宸殿前庭に構築された舞台²⁵⁾の記録がある。

舞台の間口と奥行（図-1）では、江戸城表能舞台の間口と奥行を比較すると、今宮神社御旅所の両寸法ともほぼ同じである。豊響殿の間口は僅かに小さく奥行はほぼ同じで、梨木神社の間口はほぼ同じであるが、奥行は三分の二程度である。五社神社は小振りであり、禁中の舞台に近い。

舞台の後座奥行と脇座幅（図-1）では、豊響殿と今宮神社御旅所の後座奥行は江戸城表能舞台の十分の八程度である。梨木神社は四つ目の平面形式による建築空間の制約によって後座奥行が十

分には取れないことが考えられる。豊響殿と今宮神社御旅所の脇座の幅は江戸城表能舞台より僅かに小さい。五社神社は本舞台より後座、脇座を張り出さないで舞台空間を形成している。

舞台の正面開口（図-2）では、縦横比をみると、江戸城本丸能舞台1,77、豊響殿2,06、今宮神社御旅所1,88、梨木神社3,03、五社神社2,48である。豊響殿、今宮神社御旅所は江戸城本丸能舞台に近い縦横比であり、梨木神社は横長の正面開口であり、五社神社はその中間である。梨木神社の横長開口は室内における敷舞台の制約に起因している。

橋掛りの幅、全長と角度（図-3）では、今宮神社御旅所の橋掛り幅は江戸城本丸表書院と、豊響殿は西本願寺奥能舞台とほぼ同じである。五社神社は西本願寺奥能舞台の三分の二程度である。江戸城本丸能舞台の橋掛り全長は舞台開口の2,7倍であり、豊響殿は1,4倍、今宮神社御旅所は2,2倍、五社神社は1,1倍である。今宮神社御旅所の橋掛り角度は西本願寺表舞台と同程度で、豊響殿と五社神社はほぼ直角である。

7. まとめ

今宮神社御旅所の舞台は江戸城表能舞台を規範とした本格的なものであるが、装飾は控えめで、簡素な造形である。豊響殿は元々仮設舞台として構想されたものであるが、その主要構造を北山丸太で構築した形姿は現存する舞台では類例がなく、柔らかな造形美を呈している。室内の敷舞台形式である梨木神社の舞台は、観能との繋がりが強い空間構成であり、親しい少人数による催能が想起される。五社神社は小振りの舞台で、農家風な佇まいを呈している。江戸城表能舞台の規範による建築形態を基本としながら、京都市中に現存する能の舞台は多様な造形を示している。

謝辞 調査に際して、森口克洋氏（関西セミナーハウス）、佐々木従久氏（今宮神社）、亀井薫氏（今宮神社御旅所）、多田隆男氏（梨木神社）、清水豊啓氏（五社神社）に多大なご協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 西野春雄、羽田昶「能・狂言事典」平凡社 1987 p387
- 2) 天野文雄「能に憑かれた権力者」講談社 1997
- 3) 山崎楽堂「能舞台」『野上豊一郎編「能楽全書」第4巻』東京創元社 1979 p12~22
- 4) 茂山千作「狂言八十年」（日本の芸談第三巻）九芸出版 1978 p134~138
- 5) 2)に同じ
- 6) 東陽堂「豊公三百年祭図会」『風俗画報臨時増刊』164号 1898
- 7) 倉田喜弘「明治の能楽(三)」日本芸術文化振興会 1996 p27
- 8) 能楽発行所「能楽」第一巻二号 1902
- 9) 今宮神社社務所「今宮神社由緒略記」2001改訂
- 10) 寛政7年初夏、澤田章「日本画家大辞典」啓成社 1913
- 11) 松野秀世「鏡板浴中浴外」金剛
- 12) 7)に同じ p439~441
- 13) 赤松俊秀「隔冥記」第二 鹿苑寺 1959
- 14) 倉田喜弘「明治の能楽(一)」日本芸術文化振興会 1996 p366
- 15) 梨木神社社務所「梨木神社のしおり」
- 16) 井上頼寿「梨木神社と松ヶ崎稻荷神社」金剛 1969

- 17) 下中邦彦「日本人名大事典」平凡社 1979
- 18) 川岡小学校創立百周年事業委員会「川岡小学校百年史」1977
- 19) 国書刊行会編纂「言繼脚記」第四 統群書類従完成会 1998
- 20) 京都市「史料京都の歴史」第15巻西京区 平凡社 1994
- 21) 竹内理三「角川日本地名大辞典」角川書店 1982
- 22) 3)に同じ p12~22
- 23) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942 p53~57
- 24) 23)に同じ 1942 p83~87
- 25) 3)に同じ p32

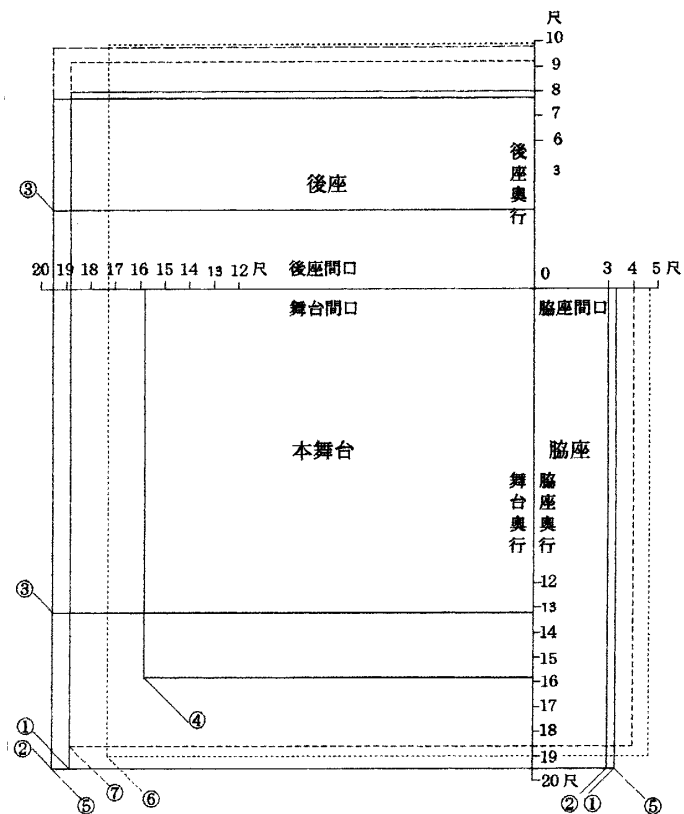


図-1 能の舞台開口と奥行

表-1 能の舞台主要寸法 (単位: 尺)

	豊響殿	今宮神社御旅所	梨木神社	五社神社
舞台間口	18,8	19,5	19,5	15,8
舞台奥行	19,5	19,5	13,2	15,8
後座奥行	8,0	7,7	3,2	
脇座の幅	3,3	3,0		
舞台床高	2,7	2,6	0,5	1,7
水引梁高	8,8	9,9	6,3	6,2
舞台柱太	0,73	0,81	0,57	0,47
橋掛り幅	6,0	7,1		4,0
橋掛り長	27,0	43,7		17,1

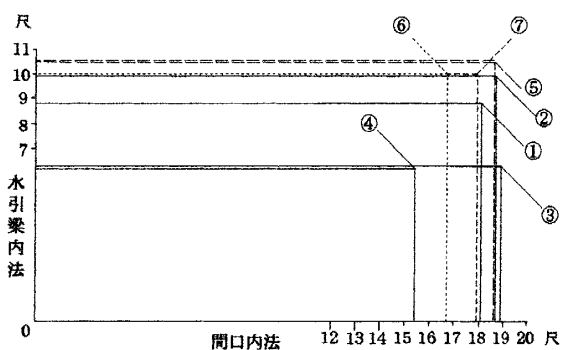


図-2 能の舞台開口内法と水引梁内法

能の舞台

- ① 豊響殿
- ② 今宮神社御旅所
- ③ 梨木神社
- ④ 五社神社
- ⑤ 江戸城本丸表能舞台
- ⑥ 西本願寺奥能舞台
- ⑦ 西本願寺表能舞台

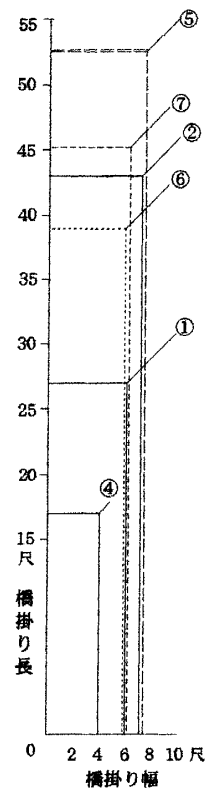
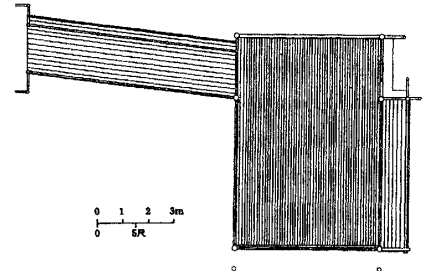
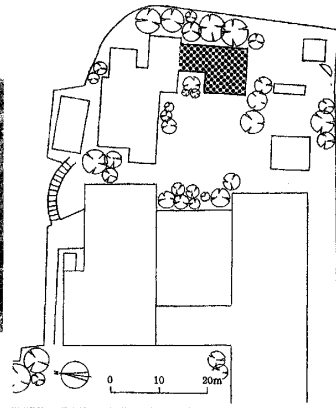
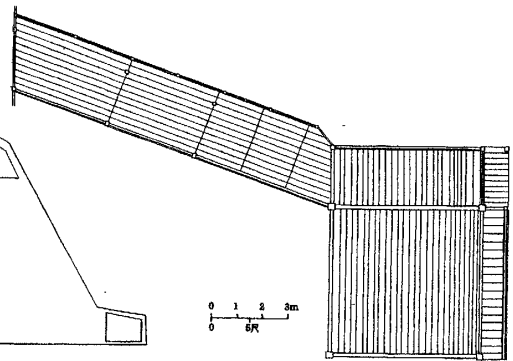
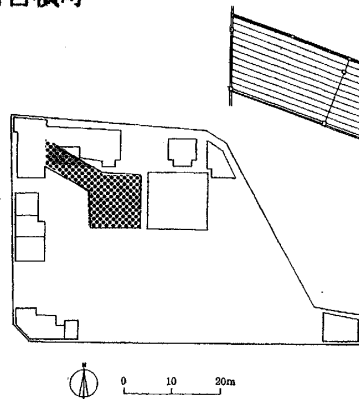
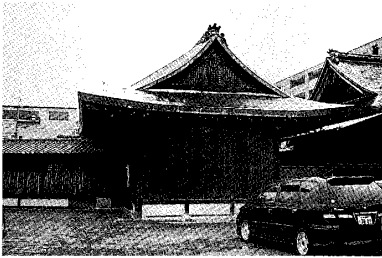


図-3 橋掛り全長と幅

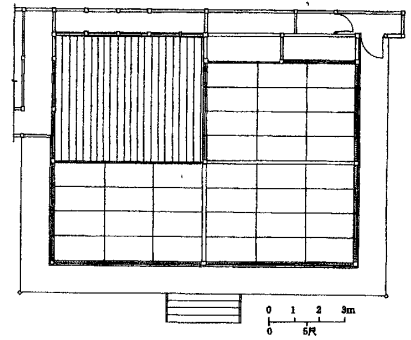
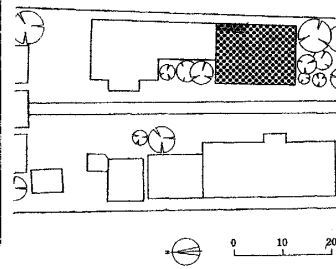
①豊饗殿 (関西セミナーハウス) 京都市左京区一乗寺竹ノ内町



②今宮神社御旅所 京都市上京区若宮横町



③梨木神社 京都市上京区染殿町



④五社神社 京都市西京区下津林楠町

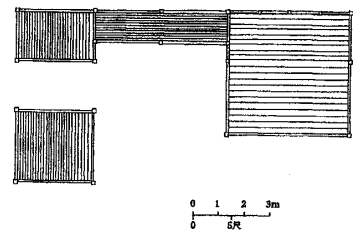
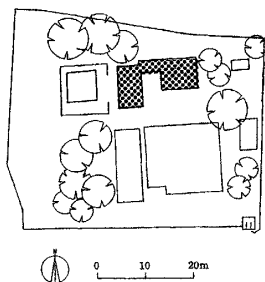


図-4 能の舞台配置図・平面図

(平成17年12月2日受理)